
3人目のスカーレットデビル

ハチミツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3人目のスカーレットデビル

【Nコード】

N4622P

【作者名】

ハチミツ

【あらすじ】

スカーレット家にもう一人妹が居たとしたら、そしてその妹が異変を起こす、そして原作キャラと対決あり、恋愛ありの、なんでもありのお話です

プロローグ

妖怪、神、人間、天人、妖精など住む世界から孤立した世界幻想郷、しかしその中で

紅き館の主レミリアスカーレットに2人目の妹が存在したら、2人目の妹の存在でどのような

物語になるのか、そんな2人目の妹を中心に幻想郷は。

幻想郷と呼ばれる世界、その中に紅魔館と呼ばれた紅き館あった、そしてその地下でとある少女が眠りから覚めた。

ミニス「……ん、朝ですか……と言ってもここは地下深くですし、朝かどうか分からないですね」

目覚めた少女の名はミニス・スカーレット、とある事情で紅魔館の地下深くにいる吸血鬼の少女。

（そういえばどのくらい寝ていたのでしょうか、お姉様達は今どうしているのですかね

うーん、そういえばフラン姉さまから聞いた話だと、異変を起こすと面白い事が起こるよって

言われましたし……やってみますか）

そしてミニスが異変を起こす物語がはじまる。

設定とご挨拶（前書き）

はじめましてハチミツと申します、小説は書くのがはじめてで誤字や脱字があるかもしれません、こんな小説でよければどうぞお付き合ってください

設定とご挨拶

ネタバレあり

ミニス・スカーレット

年齢 490歳

性格 やさしい

容姿 髪は金色でツインテール

身長はレミリアとフランと同じ
背中にはコウモリの羽

装備 頭 ミニス専用ZUN帽

武器 弾幕用拳銃

防具 ミニス専用お嬢様服

能力 能力を写取る程度の能力

ミニスのスペルカード

弾符 黒弾の迷走

迷惑 誰に当たるかわからない弾幕

弾符 戻ってくる弾幕

月影 シャドーサーヴァント

時計 始まりを示す秒針

心底 誰もが持っている心の闇

散弾 あたりに飛び散る弾幕

ラストスペル 能力を写取り招いた結果

本人からのコメント 「地下にいるのは自分の意思です、暗いところが好きなので」

設定とご挨拶（後書き）

今ところはこのくらいです、完結までがんばります

異変の準備（前書き）

すこし文字を付け足しました

異変の準備

紅魔館地下

ベッドから出て、着替をしてそのあと部屋を出てみんなが食事をする部屋へと向う、そして部屋二着くとそこには姉様達がいて、挨拶を交わしたあと食事を取り、自室へと戻った。

（さてと、どんな異変を起こしますか……そういえばレミリアお姉さまが起こした紅い霧異変を再び起こしてみましようか、そのときは私は寝ていたので参戦していませんでしたからちよいどいいです、さっそくパチュリーに紅い霧を出してもらいますか、たしか図書館にいたはずです）

ミニスは自室から出て、紅魔館の中にある図書館に向かった

図書館

「???」「ふふふふ、おもしろい運命が見えたわ」

「???」「あらレミイいたの?」

図書館には二人の少女がいた、一人は寝巻きのような服を着た少女と、もう一人はピンク色のお嬢様服を着た。

少女二人が紅茶を飲んでいた

「???」「あなた親友をなんだと思っているのかしら、パチュリーノーレッジ」

パチュリー「冗談よ、レミリアスカーレット」

レミリア「なんでフルネームで呼んだのかしら？」

パチュリー「さあ？ それでもおもしろい運命ってなに？」

レミリア「もうじき異変が起こるわ」

パチュリー「ふーん、それがおもしろいこと？」

レミリア「そうよ、そしてその異変の黒幕がここにくるわ」

パチュリー「え？」

その時図書館のドアが勢いよく開いた。

????「パチュリー！」

レミリア「来たわよ」

パチュリー「ミニスが。」

ミニス「お姉さまもいたんですか、ちょうどいいです」

レミリア「いるわよ、それでなにが丁度いいのかしら」

ミニス「私異変を起こします」

パチュリー「……直球ね」（汗）

レミリア「……………それで、どんな異変を起こすのかしら」

ミニス「第2次紅魔郷ですよ、だからパチュリーの魔法で紅い霧を出してほしいのです」

パチュリー「いやよ」

ミニス「なんですか！」

パチュリー「メリットがないわ、それに最終的にこっちが痛い目にあうことになる、だからよ。」

「じゃあ、パチュリーがいつも魔理沙って言う人との進展があれば乗ってれますか、たとえば 同居ということになれば、いいですか？」

パチュリー「のったあああああ！？」

レミリア「単純ね、それじゃあ私も」

ミニス「あ、お姉さまは役に立たないんで留守番ですよ」

レミリア「……………うわーん！ さああああくうつつつやあああああああ！？」

ドガン

レミリアは泣きながら壁を壊し図書館を出て行った

パチュリー「ちよつと！魔理沙じゃあるまいし壁を壊してフエードアウトしないでレミィ！？」

ミニス「……と、とりあえず頼みますねパチュリー」

パチュリー「わかったわ……そうだ、ミニスはなにかメリットがあるのかしら？」

ミニス「ありませんよ」

パチュリー「へ？」

ミニス「私はただの暇つぶしで異変を起こすだけです、あるとすれば博麗の巫女と戦いたい」

パチュリー「霊夢と」

「ミニス霊夢っていうんですか、お姉さまを負かした実力をこの目でみたいです」

パチュリー「まあ頑張りなさい、それじゃあ一仕事を始めるから出てってね」

ミニス「それじゃあ」

そしてミニスは図書館を後にした。

ミニスの自室

ミニス「まあ、みんなにはあんな風に言っただけ、私が異変を

起こす本当の理由はですね……」

つづく

異変の準備（後書き）

いざ書いてみると難しいですね、でも頑張ります
次は霊夢が出てきます、あとこの作品は蒼神縁起の異変が終わった
あたりを書いていきます、もしかしたら出すかも

博麗の巫女霊夢出撃

紅魔館

ミニス（さあ準備は整いました、博麗の巫女さん待っていますよ）

ミニスが異変を起こすと宣言した3時間後、やっと私が異変を起こすんだとはりきるミニス。

パチュリー「やるわよミニス」

ミニス「それではお願いします」

パチュリーは詠唱を唱え始める、そして紅魔館を覆うほどの魔方阵が展開した、そしてそこから紅い霧が噴出した。

パチュリー「これでいいわね、約束はちゃんと守ってねミニス」

ミニス「わかってますよ、それでは……ん？あれは……」

ミニスは廊下の隅から泣きながらこちらを見ているレミリアを発見した。

パチュリー「レミイがいたわ」

ミニス「……お姉さま」

レミリア「うー……」

(ちょっと意地悪しすぎたようですね)

ミニスは泣いているレミリアの所まで近づいた

ミニス「さっきのは冗談ですよ、お姉様も協力してください」

レミリア「……本当？」

ミニス「もちろんですよ」

レミリア「……ふふふ、見ていなさいこの私が再び幻想郷を紅く染めてあげるわ」

ミニス「気持ちの切り替えが早いですね……あ、そうだ言うておきたいことが」

レミリア「なによ？」

ミニス「6ボスは私ですからね」

レミリア「え、なんで？」

ミニス「首謀者は私ですから」

レミリア「……じゃあ私は5ボスを」

ミニス「5ボスはもういますから、4ボスで」

レミリア「なんで私が4ボスなのよ！ それに5ボスは誰よ」

「???」「私だよ姉様」

二人の会話に一人の少女が割って入ってきた、ミニスと同じ金髪で髪型はサイドテール、背中に七色の宝石が付いた羽、赤い服を着た少女が二人の前に現れた。

ミニス「だって5ボスはフランドール姉さまですから。」

レミリア「フランはEXボスよ！」

ミニス「異変を起こすって話したら5ボスがやりたいてって言いましたよ」

フラン「たまにはいいよね妹が上に立ったって、お姉様は偉大だから妹の頼みは聞いてくれるよね？」

レミリア「うー……でも」

ミニス「1面ボスにしますよ」

レミリア「4面ボスで結構です！」

ミニス「はい決まりました、じゃあ咲夜達にも話しておきますか。」

そしてミニスは紅魔館内の従者達に異変を起こすと通達と巫女の迎撃準備を発令した。

ミニスが霧を出す準備をしていたところ幻想郷に存在するとある神社では

博麗神社

???「ふわ……今日もいい天気ね」

神社には紅い巫女装束を着た少女が神社の境内を掃除していた、そしてその少女の名は博麗霊夢、彼女は幻想郷に異変が起これば解決に向かう空を飛ぶ素敵な楽園の巫女。

（この間の白い霧異変から数日か、あの3姉妹も結構いい奴だったし、しかし玄爺のやつ……まあ、私も悪かったけど、たまには帰ってきててもよくない……まあこんなこと言ってもしょうがない、さつさと掃除を終わらせてお茶の時間よ……ん？）

霊夢はふと空を見上げると、空から一人の少女が降りてきた。

???「はーい、霊夢遊び来たわ」

霊夢「なにしにきたの天人」

霊夢の前に降り立った少女は桃がついた帽子を被り、髪はロングヘアで髪の色は青、そしてその少女の名は比那名居天子、彼女は天界にすむ天人。

天子「遊びに来ただけ」

霊夢「タイミングがいいんだか、まあ丁度お茶の時間だから来なさい」

天子「ラッキー……ん？」

霊夢「どうしたの？」

天子「……… 空気の味が変わった」

霊夢「空気に味なんてあるのかしら………ん」

霊夢がそう言ったとたん、紅い霧がどんどん広がっていく光景が見えた。

天子「あれは何かしら？」

霊夢「白い霧が終わったら今度は紅い霧かい!？」

天子「まあ言うまでもないけど一応聞いておくわ、あれの黒幕は？」

霊夢「レミリアに決まっているでしょうが!」

天子「あははは……… つで、どうするの？」

霊夢「もちろんいくわよ、たくせつかくのお茶の時間を、徹底的にとつちめてやるわ!」

天子「やっぱりね、それじゃあ私も手伝いますか」

霊夢「私一人で十分よ。」

天子「私も異変解決したい」

霊夢「勝手にしなさい、もし邪魔をしたら即夢想封印よ。」

天子「分かってるわよ、じゃあ行きましょう」

そして二人は異変の現況の居る場所へと向かった。

つづく

博麗の巫女霊夢出撃（後書き）

次はいよいよステージ1です、一面ボスはまだ決まっていりすぎて決まらないです、どの子にしようかと迷っています、とりあえずがんばります

第2次紅魔郷ステージ1

突然発生した紅い霧、レミリアがまた起こした異変だと怒り心頭の霊夢、そして紅魔館へ向かう霊夢と天子であつた。

霊夢「あーもうございったらありゃしないわ!」

また一段とイライラしている霊夢、なぜなら道中で面白半分で襲ってくる妖精や毛玉が後を絶たないからである。

天子「ねえ霊夢そんなにイライラすることかしら?」

(カルシウムが不足しているのね)

霊夢「私はね早くこんな異変を終わらせてお茶を啜りたいのよ!」

天子「そういうわけなんだ……んじゃ、早く終わらせないとね」

霊夢「……なんか今日のあなたは変ね、異変を解決したいだなんて頭でも打ったの?」

天子「失礼ね、たまにはこういうことをしたい気分なの」

(鈍感なんだから)

霊夢「あ、そう……それより邪魔をしようとしている奴がいるわよ」

霊夢と天子は飛ぶ速度を落とし止る、そして目の前には髪が金髪で頭にリボンを着けた黒衣の女の子が二人の前に立ち塞がる。

???「わはー」

霊夢「ルーミアか」

天子「霊夢はあの子の知り合いなの？」

霊夢「ただの人食い妖怪よ、さあルーミア痛めに遭いたくなければそこをどきなさい」

ルーミア「そーなのかー？　じゃあ食べる物ちようだい？」

霊夢「んなもんないわよ、さっさとどきなさい警告はこれ以後よ」

ルーミア「んーじゃあ、弾幕勝負だよ、私が勝ったら霊夢を食べるね」

霊夢「上等じゃない！　前の時みたいに返り討ちにしてやるわ」

天子「じゃあ私は下がっているわね霊夢」

天子は少し遠くへと下がる、そして霊夢とルーミアの弾幕ごっこが始まる。

霊夢 Side

ルーミア「私は3枚だよ」

霊夢「私は2枚で十分よ」

弾幕勝負開始

ルーミア「それじゃあ行くよ、スペルカード発動」

月符 ムーンライトレイ

ルーミアはスペルカード宣言をし、霊夢に向かって弾幕をばら撒く。

霊夢「いちいちばら撒くことしかないんだから、それ」

霊夢は弾幕をよけながらルーミアに近寄ったそして。

霊夢「あんたは前と一緒にじゃないまったく、これでもくらいなさい！」

霊夢は近距離でルーミアに向けて弾幕を放つ。

ルーミア「そーなのかー！」

ピチューン

霊夢「よけいな手間をかけちゃったじゃないこっちは忙しいのに」

霊夢はルーミアを撃退し、紅魔館へと向かった。

天子「ちょっと置いて行かないでよー！」

そのころ紅魔館では

紅魔館

ミニスSide

（博麗の巫女は今どのあたりなんでしょう？ 暇ですね）

ミニス達は博麗の巫女を出迎えるために待っていた。

（早く来てください、そして私と戦ってください、そしてわたしに勝ってください、そうじゃないと この異変を起こした意味がない）

博麗の巫女はまだ来ないのかと、部屋の中ををうろろろするミニス

パチュリー「少し落ち着いたら」

（魔理沙、魔理沙）

言葉と思考が一致にしていなく興奮するパチュリー。

レミリア「パチエのほうが落ち着いたほうがいいと思う……」

そんなパチュリーを見て呆れるレミリア。

フラン「私がミニスを守るんだ、だってお姉ちゃんだもん」

フランはフランでいちだんと張り切っている。

????「私、なんでこんな仕事を引き受けたんだぜ？」

なんとなく進入して巻き込まれたエプロンドレスを着た少女。

????「まあ、どんな事があるうと私はお嬢様に従うのみ」

私は従者だから命令には従うメイド服を着た少女。

霊夢 Side

霊夢「もう少し離れないさいよ」

天子「別にいいじゃないのよ」

(本当に鈍感なんだから、好きなのに)

そして紅魔館へと向かう霊夢達であった

つづく

第2次紅魔郷ステージ1（後書き）

難しいですね、自分が下手なわけですから、ストーリーは浮かび上がっているのに、次は2面です、へたくそなりに完結を目指します。

第2次紅魔郷ステージ2

ルーミアを撃退して紅魔館へと向かう霊夢と天子、そして二人は道を抜け、湖へと辿り着いた。

霊夢「この湖を越えれば紅魔館よ」

天子「さつさと行きましょう」

霊夢「そうね、あいつに見つかからないうちに」

天子「あいつ？」

天子は霊夢の言ったあいつとはなにか聞いた。

霊夢「妖精よ」

天子「妖精？」

霊夢「そう、この湖を縄張りにしてるのよ」

天子「強いのか？」

霊夢「まあ、妖精の中じゃあ一番強いわね、ただし遭遇したら即落とすわ、スペルカードを1枚も使わずにね」

天子「ほどほどにしてあげなさい」

霊夢「んじゃ、行くわよ」

天子「うん」

霊夢は湖を早く越えるため、スピードを出して移動する、そして天子も霊夢の後を追う
そしてそのままの速度で飛んでいると陸が見えてきた、さらに遠いが紅い建物が見えてきた。

天子「あれが紅魔館？」

天子が口を開く

霊夢「そつよ、さあ覚悟なさい！」

霊夢が一気にスピードを上げようとしたそのとき。

ザバーン！

二人「な！」

突然巨大な水柱が二人の前を遮る、そしてそこから目と舌が付いた傘を持ち、髪は水色で、服も水色で白のスカート、そして下駄を履いた少女が現れた。

????「うらめしや」

いきなり現れて何を言ってんだこいつはと思った、霊夢と天子。

天子「……だれあなた？」

天子は目の前の少女に聞く。

???「わちきは多々良小傘、唐傘お化けだわさ」

霊夢「あら？ あんた確か船のときに出てきた妖怪」

小傘「げ！ あのときの赤巫女！」

霊夢「あんたは性懲りもなく人を脅かしているの？」

小傘「だってそうしないとお腹が満たされないし、生きるためだわさ」

霊夢「そんなこと関係ないわ、どんな理由あれ私の前に立ち塞がったのがあんたの運の尽きよ！」

そして霊夢は札を取り出し戦闘態勢に入る、しかし。

天子「ねえ霊夢私がやっていい？」

天子が前に出る。

霊夢「……まあいいけど、すこし温存が出来るし、じゃあ下がってるわね」

霊夢が後ろのほうへと下がる

天子「さあ、私が相手をしてあげる……ただし」

小傘「へ？」

天子の周りに黒いオーラが浮かび上がる。

天子「私の霊夢を驚かそうとした罰は受けてもらっわ」

小傘「ひええー!？」

小傘は天子の圧倒的な黒いオーラによって恐怖を感じた

(どうしよう、わちきとんでもない相手を怒らせてしまったわさ!?)

天子「覚悟はいい? トイレは済ませた? ここで神にお祈りをし
てがたがた震える準備はOK?」

小傘「……わちきに救いはないのでしょうか?」

天子「ないわ」

小傘「……こうなったら自棄だわさ!？」

自棄になった小傘はスペルカードを取り出す

小傘「スペルカード! 暴雨 スーパーゲリラ台風!」

小傘がスペルカードを発動した瞬間、左右上下から赤と青の大量の
弾幕が天子襲う、しかし天子は。

天子「わおー、すごい弾幕ね」

随分な余裕を見せる天子

天子「こんなの全部避けて見せるわ」

そして天子は弾幕のスキマを見つけては避け。

天子「あらよつと」

時にはグレイズでおいしい思いもする。

天子「グレイズおいしいわ」

完全に遊んでる天子、そしてそんな天子を見た小傘は」

（まずい、完全に遊ばれてる……どうしよう）

そんな状態が60秒あたりをすぎた、そして。

天子「ん？」

スペルカードの効力が切れて、小傘の弾幕は消える。

天子「なんだもう終わりなの？　つまらないわ……じゃあ、今度はこっちの番ね」

天子は神綱を巻いた石を取り出した、そして黒いオーラを出しながら。

小傘「もうだめだ」　逃げるが勝ちだわさ！」

天子「逃がすか！　くらえ非想の威光！？」

天子の取り出した石から無数の紅いレーザーが放たれる。

小傘「うわーん！　早苗ちゃんに言いつけてやる！」

ピチューン

（……私の霊夢に手を出すからこつなるのよ）

霊夢「終わったわね」

後ろに下がっていた霊夢が天子のそばに近寄った。

霊夢「時間をかけないでよね、さあ行くわよ」

天子「はい」

小傘を退け、紅魔館へと急いだ

一方そのころ紅魔館では

紅魔館ミニスの部屋

ミニス「……この本は読み飽きましたね」

ミニスは博麗の巫女が来るまで、部屋にある机の前で椅子に座り、本を読んでいた。

「パチュリーに言って、もっと面白い本がないのかと聞くです。

???「ミニス様」

「ん？ 咲夜ですか？」

咲夜「はい」

ミニスの隣りに一人の少女が現れた、髪の色は銀色でメイド服を来ていた、少女の名は十六夜咲夜紅魔館主のレミリアスカーレットに忠誠を誓った、紅魔館のメイド長。

咲夜「さきほど偵察の方から連絡が来まして」

ミニス「それで」

咲夜「霊夢が湖を越えて、もうすぐここに来ます」

ミニス「いよいよですか、咲夜」

咲夜「はい」

ミニス「では迎撃準備を」

咲夜「わかりました、メイド隊に伝えておきます」

ミニス「頼みますね」

咲夜「ではこれで」

そして咲夜は一瞬で部屋から退出した。

(……たしか今夜はいつも以上に月が紅く輝く日でしたね)

ガラ

机の引き出しを開け、そこには一丁の拳銃があった、そしてもうひとつカードを入れるケースがあり、そしてミニスは銃とカードケースを取る。

ミニス「いよいよですね、フラン姉様とレミリア姉様以外で弾幕勝負する日が来るなんて……まあ、これは私が選んだ運命です」

ミニスは部屋を出る、博麗の巫女と戦うための相応しい舞台へと向かった。

つづく

第2次紅魔郷ステージ2（後書き）

やっと投稿ができました、次はステージ3です
いよいよ霊夢と天子が紅魔館に乗り込みます。

第2次紅魔郷が終わったらのストーリーを早く書きたい。

あと小傘の使ったスペルカードは私の考えたスペルカードです

第2次紅魔郷ステージ3

小傘を撃退して湖を越えた霊夢と天子は目の前に見える紅魔館へと近づいていった、しかし。

天子「ん、なにあれ？」

二人の前方にはメイド服を着た妖精達が立ち塞がっていた

霊夢「あれは妖精メイドよ」

霊夢が口を開く

天子「そうなんだ仕事熱心ね……じゃあ悪いけどここは通させてもらうわ！」

そして霊夢と天子は戦闘態勢に入り、妖精メイド達の中に突っ込む。

メイド妖精1「館には入れさせないぞ！」

メイド妖精2「やるぞー！」

メイド妖精3「かかれー！」

一部の妖精メイドが口を開いた同時に霊夢と天子は弾幕をばら撒きながら猛スピードで妖精メイド達の中を突っ切った。

（いつも以上に張り切ってるわね……そういえばあいつ、今回は参加しないのかしら？ いつもなら異変が起きれば真っ先に家に来る

のに……まあ、いない奴のことを考えたってしかたないわ)

メイド妖精達「ここは通さないぞ!」

天子「ご苦勞なことで」

靈夢「雑魚妖精のくせに生意氣よ!」

靈夢は一枚の札を取り出す

靈夢「くらえ! 博麗アミュレット!」

そして靈夢は光り輝く大きな札を妖精メイド達に向けて放った。

メイド妖精1「うわーん!」

メイド妖精2「私の出番はこれで終わり!」

メイド妖精3「メイド長に怒られる!」

ピチューン

ピチューン

ピチューン

ピチューン

靈夢「まったく……そういえば天子は?」

霊夢は少し後ろを見た

天子「こんな弾幕で私を落とそうなど100年早いわ!」

天子は天子で自分なりに弾幕を避け、しっかりと霊夢についてきていた。

霊夢「あんなもんであいつがピチューンするわけないかいよいよです
ね魔理沙さん」

???「いよいよですな魔理沙さん」

魔理沙「ああ、中国」

門の前には少女と女性が立っていた、一人は髪が金髪でエプロンドレスを着て魔女の帽子を被り箒を持った少女と、もう一人は髪は赤でチャイナ服を着た女性が門の前を立ち塞がっていた。

美鈴「紅美鈴」ほんめいりん」です! いい加減名前で呼んでください」

魔理沙「そのほうが呼びやすいし、別に中国でいいじゃないか」

美鈴「ちゃんと名前で呼んでください!」

魔理沙「……わかったよ、それよりそろそろ来るんだぜ」

美鈴「わかってますよ、二つの気配がこっちに来ます」

魔理沙「二つ? 一人は霊夢だな、しかもう一人は誰だ?」

美鈴「分かりません、ですが油断ならない相手かもしれません」

魔理沙「まあ、どんな相手だろうと負けはしないぜ」

そしてしばらくして門の前に二人の人物が降り立つ。

霊夢「あら、魔理沙じゃないの」

魔理沙「よう、霊夢」

天子「いつぞやの白黒」

魔理沙「そういうお前こそ何時ぞやの天人じゃないか、珍しい組み
合わせできたんだぜ」

霊夢「そう言う魔理沙はなんでそっちにいるのかしら？」

魔理沙「今回は紅魔館側に付くぜ」

霊夢「ふーん、どうでもいいけど私の邪魔をするのなら倒すまでよ
！」

魔理沙「それでこそ霊夢だぜ！」

霊夢と魔理沙は空へと飛び上がり弾幕勝負を始める、そして残った
天子は

天子「こっちも始めますか」

美鈴「私は待機を命じられていますから、構えなくていいですよ」

天子「え、そうなの？」

美鈴「はい、ポジションを取られてしましまして」

天子「可愛そう……それじゃあ、あの二人が終わるまで立ち話でも」

美鈴「いいですね」

そして二人は立ち話を始める。

霊夢 Side

魔理沙「おらおらー！」

霊夢「まだよ！」

魔理沙は星の形をした弾幕を放ちながら霊夢の弾幕かわしていく、
そして霊夢も同じく魔理沙の弾幕をかわしながら弾幕を魔理沙に向
けて放つ。

魔理沙「どうした霊夢！ そんなものじゃないだろう！」

霊夢「それはこっちの台詞よ！」

魔理沙「なら、こっちから行くぜ！」

魔理沙はスペルカードを取り出す。

魔理沙「行くぜ！ 彗星ブレイジングスター！」

魔理沙は霊夢に向かって突進してきた

霊夢「いきなりそれを使ってくるの」

霊夢は魔理沙の攻撃を避ける、そして。

魔理沙「ちい、まだまだ！」

霊夢「次はこっちよ、封魔針！」

反撃に針の弾幕を魔理沙に向かって放つ。

魔理沙「そんなのに当たったら穴だらけなっちまうぜ」

霊夢「じゃあ、穴だらけにしてあげるわ、そしてこれはおまけよ！

ホーミングアミューレット！」

魔理沙「げ！ それも出すのかよ」

おまけとして追尾方の札を魔理沙に向かって放つ。

魔理沙「ならこっち」

魔理沙は2枚目のスペルカードを出す。

魔理沙「恋心ダブルスパーク！」

魔理沙の両手から光が集まる、そして両手を霊夢の弾幕に向ける
れ両手がレーザーが放たれる、さらに霊夢の弾幕を打ち消した、そ
して。

魔理沙「やったぜ……あれ？ 霊夢どこへ行った？」

いつの間にか霊夢がいなくなっていた、魔理沙は周りを見渡すが霊
夢が見あたらなかった、隠れたのかと思った魔理沙は霊夢を探し出そ
うとしたそのとき。

???「残念だったわね」

魔理沙「え？」

魔理沙は声が出たほうへ振り向くと、そこには後ろで自分の箒に座
っている霊夢がいた。

魔理沙「いつのまに」

霊夢「簡単よ、おとり用の弾幕を撃ち、あんたの目から私を遠ざけ
るためね。」

魔理沙「おとり？」

霊夢「そうよ、あれだけの弾幕を撃てば避けるか、あんたの場合は
でかいのを撃って私の弾幕かき消すって分かってるからよ」

魔理沙「まじかよ」

霊夢「腐れ縁というのは切れるに切れないものね、あんたのやり方

を知り尽くしているからのできた手段よ」

魔理沙「……それで」

霊夢「そして今ここであんたは私に負ける、そうするためあんたの後ろを取った……これで終わりよ」

魔理沙「まいったな、振り落とそうにもしっかりと掴まれていたら私も一緒に落ちるな」

霊夢「面白かったわよ魔理沙」

魔理沙「私もだぜ」

霊夢「それじゃあ」

そして霊夢はスペルカードを出す。

霊夢「くらいなさい！ 霊符 夢想封印！」

7色の大きい七つの玉をゼロ距離で魔理沙に向けて放った。

魔理沙「……やれやれだぜ……ぐふ」

ピチューン

弾幕勝負だ霊夢が勝った、そしてそのころ天子は。

天子 Side

美鈴「そうなんですか」

天子「まあ自分が素直じゃないから、なかなか気持ちと言えなくて」

美鈴「大変ですね」

天子「……それはそれとして、どうやら終わったみたいね」

美鈴「そのようですね、降りてきましたよ」

魔理沙を抱えた霊夢が二人の前に下りてきた。

美鈴「魔理沙さん負けてしまったのですね」

霊夢「さあ、通らせてもらうわよ」

美鈴「わかってますよ、魔理沙さんはあとでパチュリー様の所へ送ってきますから。」

霊夢「悪いわね」

霊夢は魔理沙を美鈴に渡す、そして霊夢と天子は紅魔館の中へと足を踏み入れる、そしてその様子を見届けた美鈴は。

（霊夢さんなら、何とかしてくれるでしょう）

紅魔館レミリアの部屋

レミリア「来たわね霊夢、さあ次は私が相手よ」

つづく

第2次紅魔郷ステージ3（後書き）

やっと投稿ができました、そして次はステージ4です。

第2次紅魔郷ステージ4

紅魔館内

天子「広いわね」

霊夢「さっさとレミリアの所まで行くわよ」

はやくこんな異変を終わらせて、お茶を楽しむんだからと私はいち早くレミリアの所まで行かないといけない、しかしそれだけで終わるのかしらと私の勘が告げている。

（まあいいわ、レミリアを叩き潰せば分かることよ）

霊夢と天子は奥へと進む、その途中で妖精メイドなどが掛かってきたが、そんなものはものともせず進む、そしてレミリアの部屋の前まできたがその部屋の入り口の前には一人の少女が立ち塞がっていた。

霊夢「咲夜、そこを通しなさい」

霊夢は前に出て口を開く。

咲夜「これはまた珍しい組み合わせで入ってきたものね」

霊夢「そんなことはどうでもいいわ、さっさと退きなさいよ...」
言っても退くわけないか」

咲夜「いいわよ行きなさい」

霊夢「え？」

咲夜はすんなりと部屋の前から退く。

霊夢「なんで？」

おかしすぎる、咲夜がこんなすんなりと私の言うことを聞くなんて、レミリアに忠誠を誓っている咲夜がこうもあっさりと退くなんて、何かの罠か？ それともレミリアの命令で……そんな事はどうでもいい、命令だろうと罠だろうと、退いてくれたのには変わらない。

霊夢「じゃあ、通るわね」

天子「ばいばい」

そしてすんなりと部屋の中へと入った霊夢と天子、そして残った咲夜は。

（お嬢様これでいいですね）

二人を見送った後咲夜は少し前のことを思い返していた……

霊夢と天子が紅魔館の中へと入ったとき咲夜はレミリアに呼び出されていた。

レミリア「咲夜、あなたも美鈴と同様で待機を命ずるわ」

咲夜「そ、それはどういことですか？」

このときの私はなぜお嬢様にそんなことを言われたのか分からなかった、長年仕えてきた私はこんな事は初めてだった、なぜ待機を命じられたのか。

咲夜「し、しかし私はミニス様の異変を……！」

レミリア「咲夜、私に二度も同じ言葉を言わせるのかしら？」

レミリアはギロリとした目で咲夜を見た。

咲夜「……申し訳ありません」

レミリア「……別に私は意地悪で咲夜に待機を命じたわけじゃないわ」

咲夜「え？」

レミリア「あなたには霊夢が異変を解決した後の仕事をしてほしいの」

咲夜「後のですか？」

レミリア「そうよ、だからある程度妖精メイドは残しておいて頂戴、それと霊夢とおまけの天人と遭遇したら速やかに通しなさい」

咲夜「分かりました」

そして私は部屋を出た直後霊夢と天人と遭遇した、さらにお嬢様の命令どおりに二人を通した、そして今に至る。

（さあ、残っているメイド達を集めますか）

霊夢 Side

レミリアの部屋に入った私は椅子に座り何事もなかったようにこっちを見ているレミリアを発見した。

霊夢「レミリア！」

レミリア「霊夢じゃないの、どうしたのかしら？ そんなにいきり立って……」

霊夢「あんたまた性懲りもなくこんな異変を起こして！ さっさと止めなさい！」

レミリア「止める？ 誰が？」

霊夢「あんたに決まっているでしょうが！」

レミリア「止めると言われてもね……そもそも異変の首謀者は私じゃないし」

霊夢「……は？」

惚けているのか？ それとも……だがしかしこんなことが出来るのはレミリアしかないし、ましてやフランがこんな事を思いつくわけはない。

（あーもう、分けわかないわ！）

天子「だったらもう一人いたら？」

霊夢「え？」

レミリア「どういふことかしら？ 天人」

天子「簡単よ、まだ私達が知らない人物がこの館の中に居ると言うことよ」

レミリア「ほう」

霊夢「つまり私も知らない誰かがこの異変の首謀者ということ」

天子「そうなるわね……どうかしら吸血鬼？」

天子は自信満々にレミリアに自分の推理を話す。

(……この天人侮れないわね、しかし私を倒しても異変は解決しないという事は分かっているわね)

霊夢「どうなのレミリア？」

レミリア「……………」

さすがに素晴らしい、こんなに早くあの子の存在を推理といえ勘付くとは……そして私はそろそろお遊びは終わりにしよう思い臨戦態勢をとる事にした。

レミリア「どう思うとあなたの勝手よ、しかし知りたかったら私を

倒しなさい、私が負けたら隠していることを話すわ」

天子「わかったわ、じゃあ始めましょう」

霊夢「行くわよ！」

レミリア「2対1か……たまにはいいわねハンデをあげても」

霊夢「ハンデ？　今回は余裕があるのね」

レミリア「私を倒した後は残り二人が待ち受けているわ、早く終わらせたいでしょう？」

天子「まあいいわ、さっさと始めましょう」

そして3人は部屋から飛び出し、屋敷内で弾幕勝負を開始した。

霊夢「まず私から！　ホーミングアミュレット！」

レミリア「ならこっちはレッドマジック！」

天子「私もお忘れなく！　非想の威光！」

そしてお互いの弾幕が飛び散り、ぎりぎりですり抜けながらお互いは弾幕を撃ち続ける。

（なかなかやるわね）

こんなに早くレミリアと戦うことは予想外だった、しかし私はここで負けるわけにはいかなかった、なぜなら、私のお茶の時間を邪魔

した首謀者に制裁を加えるまでは。

（やるわね霊夢）

あの時以上にパワーアップしているのに霊夢はあのとより強くなっているなんてね、前の白い霧異変でそうとう力をつけたに違いない、でも妹のために私は負けない、しかしあの子のために霊夢をほぼ万全で通さないといけない、そうじゃないとミニスの異変に便乗した意味がなくなる、これはチャンスなんだと、あの子を地下から出すために、だから私は犠牲になる、でもただで負けてやるわけにはいかない紅魔館の主として、だから。

（だから霊夢、私はあの子を地下から出すために、私はあなたに掛けるわ運命を見る必要がないくらいにね）

天子「呆けているんじゃないわよ！」

レミリア「っは！ 悪いわね、じゃあそろそろ飽きてきたからこれで終わりよ」

霊夢「それはこっちの台詞よ！」

天子「さっさと倒れてよね」

そしてレミリアは手に力を入れる、そして紅い槍ができあがる。

霊夢「やっぱりそれでくるのね」

レミリア「行くわよ！ 神槍スピア・ザ・グングニール！」

霊夢「霊符 夢想封印！」

天子「乾神 荒々しくも母なる大地よ！」

そして渾身を込めたお互いの一撃がぶつかり合う。

ドガーーン！？

さらにぶつかり合った弾幕が爆発して3人を巻き込んだ。

(……わたしは勝ったのか、それとも負けたのか？)

霊夢「わたしの勝ちよレミリア」

レミリア「……え？」

レミリアの前にはボロボロだったけど霊夢がいた、そして霊夢に介抱されていた。

霊夢「やっと目を覚ましたのね」

レミリア「霊夢……ありがとう」

霊夢「な、なによ急に」

レミリア「介抱してくれたから」

いきなり何を言っているのかしらこの子は、まあはやくレミリアが隠していることを聞かないと後ろで天子が黒いオーラを出しながらこっちみているし。

天子「ぱるぱるぱるぱる」

霊夢「……それよりレミリア」

レミリア「ん、なに？」

霊夢「隠していることを聞きたいんだけど」

レミリア「そうね約束だったわね……まあ、その天人の言ったとおりよ、そして首謀者は私の妹の妹よ」

霊夢「妹の妹……フランより下がいるの？」

レミリア「そうよ、その子の名はミニス・スカーレット、普段は地下深くで本を読んでいる」

霊夢「なんかパチュリーみたいね」

レミリア「……それは否定しないわ」

霊夢「とにかくそいつをとっちめればこの異変は終わるといわね」

レミリア「そうよ、そしてミリスは図書館にいるわ」

霊夢「わかったわ、行くわよ天子」

天子「ぱるぱるぱる」

霊夢「いつまでやってんのよ!」

ガキン!

天子「痛いわ霊夢」

霊夢「さっさと来なさい!」

そして霊夢と天子は図書館へと向かった。

(がんばってね霊夢)

つづく

第2次紅魔郷ステージ5（前書き）

レミリアを撃退して首謀者を知った霊夢天子は図書館へと向かった。

第2次紅魔郷ステージ5

何時だったか忘れた。

でもこれだけは憶えている。

私はずっとあの子を守ってきた。

どんなに苦しくても。

私はミニスの盾になると決めた。

だって私はお姉ちゃんだもん……。

紅魔館通路

霊夢 & 天子 Side

霊夢「あれ？ 静かになったわね」

入ってきたときあれだけいた妖精メイドが煙のようにきえてしまい、今では何事もなかったように静かになっていた。

天子「あら、本当ね」

これはレミリアの命令だなと思った私、でも奥にいけば残った二人があいてになるだろう、しかしどんな事があるかと私は霊夢を守る、この気持ちが伝わる事がなかったとしても霊夢が死ぬまで私はどんな手を使っても守る。

霊夢「どうかしたの？」

天子「あ、なんでもないわ……それより次は私が行くわね」

霊夢「そうしてくれる、すこしレミリアの戦いで疲れたから」

天子「わかったわ」

二人は図書館へと向かう。

図書館

フラン Side

フラン「ミニス、無理をしたらだめなんだからね」

ミニス「分かってますよ、姉様は心配症ですね」

フラン「うー…だって」

ミニス「私は大丈夫ですから、姉様こそ無理をしないでください」

パチュリー「二人とも準備は出来たわ、あとはフランが図書館から出れば結界は完了するわ」

ミニス「分かりました、じゃあ姉様」

フラン「うん、後でね」

私は図書館から出る、そして。

ボタン

（これで私を倒さない限り中へは入れない）

そして私は霊夢を迎え撃つために扉の前に立ち塞がる。

（どんな事があっても私はミニスを守るから）

霊夢&天子Side

天子「本当に静かね」

霊夢「通してやるわと言わんばかりの状況ね」

ここまで静かになるとは、私もさすがになにか畏あるのだと疑い始

めるくらいの静けさ、しかしそれもこの先へとたどり着けば賑やかになるんだと思う。

（余計な力を使わずに済むんだから、これはこれでありがたいわ）

霊夢と天子はゆっくりとした速度で図書館の扉の前までたどり着いた。

霊夢「今度はあなたね、フラン」

フラン「うん！」

霊夢「分かっていると思うけど、そこを通してくれない？」

フラン「……別にいいけど」

霊夢「え？」

天子「じゃあ、通らせてもらっわ」

天子が前へ出たそのとき

ドガーン

天子「な！」

フラン「私を倒してからだけど」

フランは炎を纏ったレーヴァティンを持って天子につきつけた。

天子「結局こうなるのね……なら私も！ 非想の剣！」

天子は帽子から筆を出した、そしてその筆から光の刀身が出現した。

天子「ここからは本気で行くわ、霊夢」

霊夢「さっさとやっつけなさい」

天子「わかったわ!」

フラン「じゃあ、行くよ!」

天子とフランとの弾幕勝負が始まる。

天子「先手必勝よ! 非想の威光!」

フラン「禁弾 スターボウブレイク!」

ドガン

天子「いきなりスペルカード!」

フラン「こっちは早くあなたを倒して霊夢を倒さないといけないんだから」

天子「ならこっちは非想の剣!」

私は吸血鬼に向かって、剣を振り下ろした。

フラン「禁忌 レーヴァテイン!」

フランはレーヴァテインで天子の攻撃を防ぐ

ガキン！

天子「簡単にはいかないか……」

フラン「もうこれで終わらせる余計な時間は与えないよ！ 禁忌
フォーオブ・アカインド！」

フランは次のスペルカードを使うと、フランは3体の分身を作り出した」

フラン1「これでおわりしてあげる」

フラン2「行くよ」

フラン3「あなたの負けだよ」

フラン4「さようなら」

天子「なに！」

4人のフランは天子に向かって弾幕を撃ってきた。

天子「ちい！」

私はすぐさま吸血鬼の弾幕をかわす。

フラン1「どうしたの？」

フラン2「よけるだけで精一杯なの？」

フラン3「この程度かしら」

フラン4「じゃあ、さっさと終わらせてあげる」

天子「くっ！」

どれが本物かは分からないが、しかし私は負けるわけにはいかない
霊夢のために負けるわけには……

そんなときだった。

霊夢「あゝ、まったくもう、そんなので手間取っていたら私と異変
を解決したいだなんて100年早いわよ天子」

霊夢が後ろから天子に渴を入れてきた

天子「霊夢……そうね、じゃあ一気に掃除するわよ」

私は非想の剣を床に突き刺す。

フラン1「な、何の真似なの？」

天子「言ったでしょう、一気に掃除するって」

ゴゴゴゴゴゴ！

フラン1「なんなの！」

フラン2「地震！」

フラン3「怖いよ！」

フラン4「はわわ！」

天子「全員潰れる！」

天子がそう口にすると、その瞬間。

どーん！

フラン達「なにこれ！」

フランたちの足元とその周りから勢いよく石の柱が飛び出した、そしてそのまま天井まで一直線に伸び続けた。

フラン達「そんな！？」

ピチューン

ピチューン

ピチューン

ピチューン

天子「私の勝ちよ、吸血鬼」

霊夢「やったわね天子」

天子「霊夢のおかげで勝ったわ」

霊夢「いいわよ別に……それはそれとしてこの石柱なんとして、進めないわ」

天子「わかったわよ」

天子は自分の出した石柱を砕いた、そして上から潰れたフランが落ちてきた。

フラン「な、なんで……」

天子「とりあえず私の勝ちだから、通るわね」

私は扉に手を掛けた。

バチン

天子「痛！」

霊夢「天子！ これは結界ねパチュリーの仕業だわ」

天子「もう、姑息な手を……何とかならない？」

霊夢「できるけど……これは少し時間が掛かるわね」

天子「でも壁とかは？」

霊夢「同じ目に遭うわよ」

天子「まじで」

???「その必要はないよ」

天子「え？」

霊夢と天子は後ろに振り向いた、すると倒したと思っていたフランが立っていた。

フラン「その結界は私を倒すと解けるよ」

天子「本当？」

フラン「嘘じゃないよ、だからこの一撃に私はすべてをかける！」

天子「抜き打ちのつもりかしら……いいわよこれでお終いにしあげる！」

私はこいつに向けてラストスペルを発動する準備をした

天子「非想の剣！」

私は非想の剣を回転させて、力を込めた。

フラン（ミニスのために私は！）

私はずっとミニスを守ってきた、幻想郷にくるまえからずっと永い

時をかけてミニスを守り続けてきたこれからもずっと私はミニスを守り続ける、あの子が外に出るまで……だから私は。

フランドールスカーレットはミニスの盾となりてここであいつを倒す！

天子（この子はしっかりした子だわ……）

だからと言って私は手加減はしない、霊夢がこの子の妹と戦うためにすこしでも回復させないといけない。

この子には悪いけど私は霊夢のために負けるわけにいかない、だから私はこの子に勝つ！

フラン「準備いい？」

天子「いいわよ」

フラン「くらえ！ 495年の波紋！」

天子「全人類の有頂天！」

天子とフランは最大で最後の攻撃を放った

ドガーーン！

天子「きゃあああ！」

フラン「うわあああ！」

ぶつかり合った力は爆発した。

……そして。

天子「流石に今回は痛かったわ……」

霊夢「まったく結界を張らなかつたら紅魔館の中で生き埋めになっていた所よ」

天子「ごめん……それよりあの子は？」

霊夢「大丈夫よ、ほら」

私は霊夢の膝のを見ると、そこにはフランが眠っていた。

天子「強いわねこの子は、流石の私も負けるかと思つたわ」

霊夢「強いわよ……それに前にあったときは無邪気な子供だと思つてけど、今はしっかりした子だわ」

天子「へえ……じゃあそろそろ行きますか」

霊夢「ええ」

天子「結界は？」

霊夢「消えているわ」

霊夢はフランをお姫様抱っこすると、図書館のドアを蹴破り中へと入った。

天子「いいな……ばるばるばる」

霊夢「はやくきなさい！」

図書館

パチュリーSide

パチュリー「来たわね、それじゃあ言われたとおりに行動するわ」

つづく

第2次紅魔郷ステージ5（後書き）

メリークリスマス、やっと投稿できました、次はやっと霊夢とミニスが戦います。

そしてなぜミニスが異変を起こしたかあきらかになります。それではまた会う日まで。

第2次紅魔郷ステージ6（前書き）

遅れてすみません、見たい番組が多くてこっちのほうに集中できませんでした。

第2次紅魔郷ステージ6

「来たわね」

扉が壊され、そこから入ってきた霊夢と天人の前に私は立ち塞がった。

「パチュリー」

「待っていたわよ霊夢とおまけの天人」

「おまけは酷いわね」

「そんなことより、なぜここにきたのかしら？」

「分かっているくせに」

「まあ、隠すことでもないか……っで、その様子だと異変の首謀者は分かっているってことね」

「妹の妹でしょう？ レミリアから聞いたわ」

「レミイが？」

珍しいことがあるもんだと思った私。

「まあいいわ、とりあえずこの先に行くのね？」

「そうよ、通してもらっわ」

「……なら行きなさい」

「……今回はやけに快く通してくれる奴ばっかね」

「それと……それ！」

「え？」

パチュリーが霊夢に向かってなにかを投げ渡してきた。

「これはなに？」

「回復薬よ」

「毒じゃないの」

天子は警戒しながらパチュリーに言った。

「毒じゃないわ……あの子に言われたのよ」

「あの子？」

「ミニスって奴の事ね」

「自分が万全なのに、霊夢が万全の状態ではなかったらそれを渡し
といてと。」

「……そう」

妹の妹だから、フランより子供かもと思っていた霊夢だったが、ミニスって奴は結構やさしい子なんだと思った。

「じゃあ、さっそく飲むわ」

私は渡された薬を飲んだ。

「すぐに効いてくるわ、それまで奥へ歩いて行ったら？」

「そうするわ」

「それと天人はここに残ってもらうわ」

「なんでよ!」

「ここか先は霊夢とミニスの一対一の真剣勝負、だからあなたはここに残ってもらうわ」

「……霊夢はどう思う?」

「相手がフェアな勝負を挑んでくる以上ここから先は私一人で行くわ、だから天子はここでお留守番よ」

「……まあ、霊夢がそう言うなら、残るわ」

「決まりね、じゃあ行ってくるわ」

私は奥へと進んだ。

ミニスSide

「…………もうすぐですね」

もうすぐここに博麗の巫女がやってくると思った私はどんな歓迎したらいいか考えていた、幻想郷に来てから今まで地下深くにある自分の部屋で引籠もっていた為、外の事はあまり知らない……まあ、ある程度は紅魔館内の妖精メイドから情報を聞くのだから、全然理解できなかった為どうしていいのか分からない……でもなんとかなるでしょう。

（それより、そろそろですね）

私は銃を取り出し、そして自分の羽を大きく広げた、それと同時に。

「あんたが異変の首謀者ね」

「そうですよ、そして私はミニス・スカーレット以後お見知りおきを」

「自己紹介はいいわ、さっさと紅い霧を止めなさい」

「それはパチュリーに言ってください」

「へ？」

「提案したのは私ですけど、紅い霧はパチュリーの魔法で噴出していますから」

「あいつ！」

「しかし、ここまできたら引き返せませんよ」

「え？　なんで」

「ラスボスからは逃げられませんよ」

その言葉と同時に私は魔法陣を展開した、そしてまわりに結界を張った。

「これは私を倒さない限り解けない仕組みにしています、だから引き返すことはできません」

「やってくれるじゃないのよ」

「……さあ、始めましょう最初で最後の私とあなたの弾幕ごっこを！」

「いいわよ、そしてあんたを叩き潰してあげるわ！」

そして二人は弾幕勝負を開始した。

「まず私からいきます！　弾符黒弾の迷走！」

私はスペルカード宣言をした、そして銃口を霊夢に向けて撃った。

バンバンバン！

さらに黒い弾幕が霊夢を襲う。

「しょばい弾幕ね……封魔結界！」

霊夢は結界を張りミニスの弾幕を防ぐ

「うまくいきませんね……ではこれではどうですか？ 迷惑誰に当たるかわからない弾幕」

ミニスは2枚目のスペルカードを使った、そして無数の弾幕があたりにばら撒かれる、まさに無差別と言わんばかりの数だった。

「らしくなったわね、こっちも反撃を開始するわ！ 宝具陰陽鬼神玉！」

私はスペルカードを使う、そして陰陽玉と呼ばれる博麗の神器をミニスに向けて放った。

「当たつたらまずいですね……ですがこちらにも負けませんよ！ 弾符戻ってくる弾幕！」

バンバンバンバン！

「また同じことする気？」

霊夢はすんなりよける。

「まったく……な！」

かわした弾幕が霊夢に向かって戻ってきた。

「グレイズよ！」

「よくやりますね、さすがだと言っておきます」

「まだまだよ、次はこれよ！ 夢符封魔陣」

霊夢が次のスペルカードを宣言すると、無数の札があたりにばら撒かれる。

「動きを封じる気ですか？ やっかいですね時期にこっちがやられますね」

まあやられるのが目的の一つですからいいんですけど、でも挑んだからには最後までやりますよ、それが礼儀というもの。

「体がもう一つほしいですね……なら！ 月影シャドーサーヴァント」

「なにそれ！」

霊夢が叫ぶとミニスのとなりには黒い姿をした無数のミニスが立っていた。

「これは弾幕ですよ、人型ですけど」

「人の形をした弾幕なんて始めてね見るわね」

「では行きますよ」

私は霊夢に向けて人型弾幕を放った。

「突撃タイプね……ただどこで終わりよ！…

私は得意技を出した。

「霊符夢想封印！」

「……これは」

物理法則を無視した弾幕がミニスに向かって放たれた、しかしミニスは避けようとするが。

「この札が邪魔ですね」

さっき霊夢がばら撒いた札が展開しており動きが取れないミニス。

「……これでおわりですか……」

段々と霊夢弾幕が近づいてきた、しかしミニスは。

でもこれでいいのか？

いやちがう、確かに負けることが次の目的を達成する条件だ。

しかし私はこれでいいのかと思った。

私は最後の力をつかっていない。

ならば

「私はこの場を凌ぐカードは一枚しかありません……」

だからこれで終わらせる！

「何をする気かしら」

「これが私の大技！ 能力を写取り招いた結果！」

みんなの力を借ります！

「咲夜」

ミニスが呟くと、霊夢の弾幕が遅くなった、避けてくださいと言ったようだと思うくらいのスローだった、そしてかすかなスキマを見つけてミニスは霊夢の弾幕を避ける、しかし霊夢の視点ではこう見えていた。

「よけた！ そんなはずは！」

あの状態で、あのスピードで避けるだと？ わずかなスキマをあんな形でよけるなんて、しかしこの私があいつの動きが見えない……そんなスピードがあるのか？ だが私は。

「どんなことがあろうとも、私は負けるわけにはいかない！」

夢想封印をよけられたことですしあせりだし始めた霊夢、そして

「これを防げばあなたの勝ちです」

「……やってやるんじゃないのよ」

「では……パチュリー」

ミニスはパチュリーの名を呟く。

「ちょっとそれはないわ」

「そして姉様方」

ミニスは言い終わると拳銃が光りだした、そして銃口を霊夢に向ける。

「これを避けることが出来れば、あなたは最強です」

「いいから来なさい」

「これが本命の能力を写取り招いた結果！」

ミニスは引き金を引いた

私は紅魔館全員分の力を込めた弾丸を博麗の巫女に向けた放った、
そして。

「……………」

しかし霊夢は避けようとしなない。

（なぜいけないのですか？）

負けを認めたのか？ それともなにかあるのか？ しかしよけたとしてもまだまだ撃つ余裕がありますし、さあどうでるだろうか。

「……………これで終わりよ！

え？」

「夢想転生！」

「な…なに！」

霊夢は目を閉じる、そして霊夢の体が透け始めた。

「は、反則じゃないですか！」

「……………」

「えーい！」

ミニスは再度弾幕を放つが当たらない、しかし弾幕が通り抜ける、そしてこれ以上やっても無駄だと判断した。

「私の負けですね」

そして疲れた私は、目の前から飛んでくる弾幕をかわしきれず。

ピチューン

そして

「……ここは？」

私は気が付くとベッドの上にいた。

「気が付いたかしら」

「姉様」

ミニスのとなりにはレミリアがいた、ミニスを介抱してくれていたようだ。

「……姉様、私負けたです」

「ええ、知っているわ」

「……そうですか」

「これですつきりしたかしら？」

「え？」

「ずっと外に出たかったのよね」

「……はい、だから私は異変を起こしました、でも昔みたいにハンターなどがくるんじゃないかと今でも怖くて、そして私の能力を狙ってくる教会の人間からも……」

「大丈夫よ、幻想郷にはそんな奴はいないわ、それに運命が見えたわ、あなたが外で楽しく笑っているのが、だから今回がいい切っ掛けになったわ、だから私は便乗した」

「そうなのですか？　そうだ、フラン姉様の言ったとおりなら、異

変が終わった後に必ずやる行事があると言っのは本当ですか?」

「本当よ、だからすでに準備は終わったわ」

「準備って」

「あとはミニスが来れば始まるわ、さあ行きましょう」

「ちょ、ちよつと姉様!」

私は姉様に引きずられて、そのまま玄関のほうへと向かった

「さあ、扉をあけて」

「……はい」

そして私は初めて玄関の扉に手を掛けた

ガチャ

「こ…これは」

私は扉を開けるとそこには、まず空には紅い月が顔を出し、そして玄關のまえにテーブルなどが並べられており、その上においしいそうな料理や酒なども並べてあった。

「姉様、これはそうなのですか？」

「そう、これが宴会よ」

「宴会？」

「ミニス！」

「姉様」

ミニスの元にフランがよった。

「こっちにおいでよ」

「フラン姉様！」

フランはミニスの手を掴み、テーブルのほうへと向かった。

「……これで本当の意味で紅魔館が完成したわ」

「お嬢様」

「咲夜か」

「はい」

「ご苦労だったな」

「お褒めいただき、ありがとうございます」

「今夜はお前も楽しめ、ではな」

「はい」

ミニスSide

フラン姉様に引っ張られテーブルのほうへ行くと、そこには

「あら、目が覚めたのね」

「もう始めてるぜ」

テーブルには霊夢と魔理沙、天子やパチュリーが居た

「霊夢さん、魔理沙さん……その……」

「まあ硬くならないの、こっちへ来て飲みましょう」

「はい」

私は霊夢さんの隣に座った。

「ほら」

「は、はい」

霊夢がミニスのコップに酒をそそいだ。

「ゴクゴク……ふう……」

「どう？　楽しいでしょう」

「はい！　楽しいです」

「じゃあ、今夜はどんどん飲むかー！」

「私負けないようー！」

「わ、私もですー！」

「じゃあ、今度は飲み比べよう！」

そして夜が開ける前まで飲んだりして楽しんだ、これが外の楽しさなんだ、そして私は明日は外でなにをしようかなと、考えたりもした……私はもつと外を知りたい。

「あれ？　そういえば誰か忘れているような？」

紅魔館門前

「絶対に私を忘れている」

第2次紅魔郷 完

そしてつづく

第2次紅魔郷ステージ6（後書き）

紅魔郷は終わりました、そして次が恋愛タイムになるかと思っています、
ミニスを誰とくっつけようかな、

とりあえず次は年明けの投稿になると思います、ではよいお年を

設定2（前書き）

あけましておめでとーいーねーます

設定2

「ハチミツです、突然ですがこの話はもしかしたらのレミリア達の話です、そしてこの話の構成を説明します」

「まずはフランドールの設定です、フランドールに妹がいたらフランドールはしっかりした子になるのではないかと思いこの話を立ち上げた理由の一つです」

「東方キャラは自分の好きなキャラを優先して出します」

「ここから先はネタバレです」

カップリング設定

霊夢×天子

魔理沙×パチュリー

アリス×鈴仙

咲夜×美鈴

文×みすちー

妖夢×楳

フラン×こいし

レミリア×大ちゃん

さとり×チルノ

ミニス×ルーミア

早苗×小傘

「この設定で話を進めます」

「そして過去編を外伝として書きます」

「あとは話を進める内にまた設定が増えると思います」

宴会中の雑談（前書き）

お待たせしました。

宴会中の雑談

「そういえば魔理沙」

「ん？ なんだぜ」

「今回はなんで紅魔館側に付いたの？」

「それはだな」

「それは私から説明するわ」

パチュリーが二人に会話に割り込んだ。

「たまたま魔理沙が本を持って行こうした所を見つけたのよ、そして目をつぶる代わりに異変を手伝ってもらったと言うわけ」

「あんた自重しなさいよ」

「死んだら返すって約束だぜ」

（まあ、本当は報酬が目当てで協力してくれたのよね）

回想

図書館

「本当にいいのか？」

「ええ、協力してくれたら通行パスをあげるわ、そうすればいちいち壁を壊すことはないでしょう」

「約束だぜ！」

「交渉成立ね」

回想終了

（本当なら同居でもよかったんだけど）

フランSide

(これでよかったんだ、この結末こそが私とお姉様が望んだ結果)

「フラン」

「お姉様」

にっこり笑顔のレミリアがフランに詰寄った。

「顔が近いよ……」

「フラン、あなたの作った舞台は楽しかったわよ」

「……なんのことかな?」

「惚けないの、今回の異変はフランが囁けたんでしょう」

あちゃーとした顔になったフランは渋々話し始める。

「……やっぱりバレちゃったか」

「あなたに道化師は似合わないわよ」

「無理があつたかな」

「でも、フランのおかげでミニスは外に出ることに興味を持つてくれたし、まあ結果オーライね」

「そうだね」

そう、これでよかったんだと私はこの結果にうれしく思う、今回の異変の真の目的は私達が幸せになるための序章として物語が始まることを願う。

ミニスSide

「天子さん落ち着いてください!」

「霊夢」

「この酔っ払い天人!」

「冗談きついで」

「ムキユ」

酔った天子は霊夢を抱きしていた。

「霊符夢想封印!」

どーん!

「ぎゃああああ!」

「まったくもう！」

「愛される人はつらいね」

「何言ってるのよ！ アホ魔理沙！」

「なんだとこのやろっ！」

「はいはい、喧嘩はよしなさい」

「そうですよ、朝まで仲良く楽しみましょう」

そして明け方に宴会は終わり、みんなは帰っていった。

つづく

宴会中の雑談（後書き）

短くてすみません。

外伝前編（前書き）

遅れてすみません、リアル事情やこの小説のネタ集めをしていました。

外伝前編

私達が幻想郷に来る前いろいろなことがあった。

一つ目は教会に追われる日々。

二つ目は吸血鬼ハンターがあとをたたない。

三つ目は私達が殺した遺族やその友であろう人間の復讐者達。

そんな事から今日まで生きてきた私達の過去話。

幻想郷に来る200年前、私達は戦乱の中でも幸せに生きることがを願っていた……だがある日。

200年前イギリス

紅魔館

「姉様、私怖いです……」

「大丈夫よ、ミニスは私達を守るから」

「そうだよ、だから待っていてね」

「はい」

当時の私は臆病で戦うことが大嫌いでした、でも戦わなければ自分達に明日はない状況だったから、でも姉様達は優しかったから、私はいつも屋敷の中で二人の戦いを見ていた、そんなある日姉様が一人の魔女と妖怪を連れてきた。

「姉様、この二人は……」

私は二人に警戒した。

「大丈夫よ、この二人は私達の仲間よ」

レミリアが説明する

「仲間？」

「初めまして私は紅美鈴です」

「パチュリーノーレッジよ」

「…私はミニスです」

「フランドールだよ、フランって呼んでね」

「よろしくね」

「よろしく」

パチュリーと美鈴が私の仲間になった、でもパチュリーは客扱いだった、美鈴は姉様の従者……このときの私はなんてかなと思った

どそのうち分かった、そして。

50年後

「この人間の敵め！」

「殺せ！」

「生きて返すな！」

とまあこんなセリフをほざいている人間がまたやってきた。

「まったくきりがないわね」

「仕方がないわよレミィ、人間は数だけがやかいだから」

「まあ、蹴散らせばいいのですよお嬢様」

「そうね」

紅魔館内

「姉様、大丈夫でしょうか」

「大丈夫だよ、お姉様は強いから」

「でも……」

「それに、私がミニスとここにいるかぎりお姉様は安心して戦えるんだよ」

「……そうなのですか？」

「うん、だって私はミニスを守るから」

フラン姉様は子供っぽいけど、どこか安心できる所があった。

レミリアSide

「雑魚が」

レミリアは戦いを終えた、そして屍の山が出来ており、自身の服には大量の返り血が付いていた、そこにいた美鈴やパチュリーにも」

「汚いわね、お風呂に入らないと」

「私も一緒にいいですか」

「とりあえず汚れを落とさないと」

そしていつもどおり姉様達は屋敷に帰ってきた。

さらに50年後

「なんですって！」

「どうしました姉様？」

レミリアはいつもの落ち着きなく焦っていた。

「運命が見えたのよ」

「運命？」

「そうよ、教会の連中が全総力をあげて私達を滅する運命が見えたわ」

「それだったら運命操作すればいいのではないのですか？」

「……あ、そうだった」

「私達ではなくあいつらが滅亡する運命に変えれば」

「そのとおりね、でもなんであんなに焦ったのかしら？」

「疲れているのでは？」

私は姉様言った。

「そうかも」

そしてこの数日後、騎士甲冑を着た集団が迫ってきた。

「すごいわね」

「そうだね」

「でもやるしかないわ」

「はい」

「じゃあ、いつもどおりの陣で」

そして私達は教会との決戦かもしれなかった、でもこのあとあんな事が起こるとはこのときのみんなはまだ知らなかった

つづく

外伝前編（後書き）

ここで切ります。

外伝中編（前書き）

気が付いたら2ヶ月以上たっていました。

外伝中編

紅魔館門前

レミリアSide

レミリア「さあ、やるわよ！」

パチュリー「はやく終わらせて読書の続きをするわ。」

美鈴「行きます！」

レミリア達は向かってくる教会の兵士を迎撃に向かった。

兵士Side

兵士A「来たぞ！ レミリアスカーレットだ！」

兵士B「殺せ！」

隊長「ようし、全軍突撃！」

紅魔館屋敷内

ミニスSide

フラン 「……始まったね。」

ミニス 「はい……」

窓からレミリア達の様子を心配しながら見守る二人。

ミニス 「姉様、大丈夫でしょうか？」

フラン 「大丈夫だよお姉様達はすぐくつよいもん。」

ミニス 「……でも」

フラン 「安心して、いざとなったら私がいるから」

ミニス 「姉様。」

フランはミニスを安心させようと強気でミニスをはげます。

フラン 《そう、私の能力があれば。いざとなったら。》

心の中でいざとなったら自分のありとあらゆるものの破壊する程度能力を使えば……っと、フランは心の中で決意した……そして。

??? 《見つけた、これより確保する》

二人を見つめる不気味な影がここに存在していることにこのときの二人は気が付かなかった。

紅魔館門前

レミリアSide

兵士A 「ぎゃあああああ！」

ボン

レミリア「汚い花火だ」

パチュリー 「服に付いたじゃないの！」

レミリア 「気にしないの」

パチュリー 「まったく」

あらかた兵士を片付けた3人は余裕の顔を見せながらはしゃいでいた。

美鈴 「……それよりお嬢様」

レミリア 「分かっているわ……さてと」

レミリアはあるところに視線をあてる

隊長 「おのれ悪魔め！」

レミリア 「あいつが隊長ね」

隊長 「まずい、逃げなければ！」

兵士B 「隊長どこへ！」

隊長 「うるさい！」

兵士を押し退け一人だけ逃げ出す隊長、そしてこれを見たレミリアは。

レミリア 「死ぬ覚悟もないくせに、戦場に出てくるな！」

そしてレミリアは、まるで血のように紅い槍を作り出し隊長に狙いを定めた。

レミリア 「くらえ！ スピア・ザ・グングニール！」

隊長 「ひiiiiiiiiiii！」

ぐちゃ

レミリアの攻撃で隊長は肉片へと姿を変えた。

兵士達 「逃げろ！ もうおしまいだ！」

パチュリー 「賢者の石」

兵士達 「ぎゃあああああ！」

バーーン

レミリア 「なさけない」

美鈴 「では帰りましょう」

パチュリー 「そうね」

3人は紅魔館へ入ろうとしたそのときだった。

ドガン！

レミリア 「え？」

突然紅魔館から爆発音が3人の耳に届いた

パチュリー 「レミィ！」

レミリア 「わかっている！」

3人はいそいで紅魔館のへと急いだ。

紅魔館屋敷内

レミリア 「フラン！ ミニス！……っ！ フラン！」

レミリアは倒れているフランを見つけ、駆けつける。

フラン 「……お……ねえ……さま……」

レミリア「なにがあったの！」

フラン「み…ミニ…ス…が…」

フランはそうつぶやくと気を失った。

レミリア「ミニスがどうしたの！ フランしっかりして！」

パチュリー「レミイ、気を失っているわ。とりあえず妹様をベッドに運ぶわ」

レミリア「……頼む」

パチュリーはフランを抱き上げ部屋と運んだ

美鈴「とりあえず、フラン様が目覚めるのをまたないと」

レミリア「……そうね、フランとミニスの身になにがあったか、それを聞かないと。」

数分後

フラン「……ん…ここは……？」

レミリア「大丈夫フラン」

フラン「お姉様……っは、ミニスが！」

レミリア「おちついて、とりあえずなにがあったか話してほしいの」

フラン「…あ、わかった。えーと、お姉様達が戦っている時のことなの」

回想

フラン「…っく！」

ミニス「姉様！」

突然後ろから何者かの攻撃を受けたフラン、そしてミニスは後ろに黒い影の男が立っている事に気づいた。

黒い影「ふふふ、どうかね聖水の味は」

ミニス「不意打ちなんて汚い！」

黒い影「くくくく勝てばいいのだ、さてとミニススカート我と共に来い！」

ミニス「嫌です！」

黒い影「そうか……ではこれでも喰らえ！」

黒い影はミニスに向かって、黒い輪のようなものを投げつけた、そしてその輪はまるで意思を持っているかのようにミニスの腕に取り付けられた。

フラン「ミニス！」

ミニス「外れない！」

黒い影「くくくく、さあ我と共に来い」

キーン

ミニス「……はい」

ミニスは男の所へと歩いた。

フラン「ミニスになにをしたの！」

黒い影「これは操りの輪と言ってな、これを付けられた者は私の操り人形と化すのだ。」

フラン「そ…そんな、ぶっ殺してやる！」

黒い影「盾になれ」

ミニス「はい」

フラン「……！」

ミニスがフランの前に立ちふさがった。

フラン「み…ミニス……どうしてミニスなの！」

黒い影「こいつの能力だよ」

フラン「能力？……まさかあなた！」

黒い影「そうだ、我は能力を写取る能力を持ったこいつを狙っていた！」

フラン「しかし、能力なら私のほうが」

黒い影「たしかにそうだ、しかしお前の破壊の能力では我の目的は満たされないのだ」

フラン「目的はなんなの？」

黒い影「くくく、ある男の能力の写取るだけだ、そしてその力で……っと、喋るのはここまでだ、それに目的の第一段階は済んだ。もうここには用はない、さらばだ！」

フラン「まって！ミニスを返して！」

黒い影「そろそろ聖水の効果が全身に回る」

フラン「……う！」

ばたん

くずれるように私は倒れた。

回想終了

フラン「覚えているのはここまでだよ」

レミリア「そう……」

フラン「……私、ミニスを守れなかった」

レミリア「フランは頑張ったよ、そしていっしょにミニスを助け出そう」

フラン「……お姉様……うん！」

????

ミニスSide

黒い影「くくく、いよいよ第2段階だ」

ミニス「……………」

黒い影「今からお前にある男が能力を使うところの記憶を見せる、その記憶の男が使った能力を写取るんだ」

ミニス「はい」

う
う
う
う

外伝中編（後書き）

ミニスの能力の発動条件

1 相手が能力を使っている所を見る

2 記憶の中でも適応される

お知らせ

お久振りです、ハチミツです

一応生存報告です、この作品を待っているかた、本当に申し訳ありませんでした（土下座）

リアル事情でなかなか更新ができません、次からは亀更新になります、本当にすみません。

でも連載は続けます。

今後ともよろしく願います。

でも自分が高校生の時に書いていた二次創作小説の連載を考えます、その小説のストックが残っていますから時間が掛からないと思います、気が向いたらうっしょうとおもいます、期待せず待っていてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4622p/>

3人目のスカーレットデビル

2011年10月8日12時22分発行